2015年3月31日発行

ニュースレター No.37

News Letter

INSTITUTE FOR THE STUDY OF CHRISTIANITY AND CULTURE

キリスト教と文化研究所に期待すること

学院長　経済学部教授　小河 陽

このたび学院長に就任しました小河陽です。己の微力さを十分に自覚しながら、今後4年間学院の教育と研究の発展のために励まなければ、と考えております。皆様の暖かいお力添えをお願いしたく思います。

関東学院は「人になれ 奉仕せよ」との校訓のもと、「奉仕教育」を学院の特色として学内外にアピールしています。しかし、本学が本当にその特色として力説しなければならないのは、「その土台はイエス・キリスト也」を含んだ全体としての校訓でなければならないと思います。さもなければ、本学の校訓はごく平板化されて、高い教養を持ちボランティア活動に理解ある紳士淑女の育成の勧めと誤解されてしまうことでしょう。

私がキリスト教と文化研究所に期待することは、まさに本学の教育目標の根底を支える「人間とその営為としての文化」についての深いキリスト教的洞察・省察です。もはや誰も押し止めることのできないグローバリズムの進展に伴って、人間とその文化はますます複雑で多様な側面を見せるようになっています。このような歴史的情況に置かれた私たちは、単に伝統的なキリスト教教義やその人間理解を掘り出し提示するだけでは到底現在の人間と社会に意義ある研究としてインパクトを与えることはできないでしょう。現在キリスト教研究に求められているのは「新しい人間学」、であり、伝統を大切にするわれわれにとってそれは「キリスト教的人間学の再創造」というモットーのもとで、キリスト教啓示と信仰に照らされて営まれる過去と現在の人間文化の精査と洞察、そしてそれによって生じるわれわれの現在と未来への提言・展望であると思います。この遠大かつ崇高な課題に怯むことなく果敢に取り組む、そういうキリスト教と文化研究所であって欲しいと思います。

ローレン・メデイロス氏を迎えて

「奉仕・ボランティア教育」研究グループシンポジウム報告

経済学部 教授　細谷 早里

二〇一四年六月二十七日に、米国ハワイ州プナホウ・ハイスクール(Punahou School)のチャプレンであるローレン・メデイロス(Lauren Buck Medeiros)氏を講演者として招聘し、公開シンポジウム「オバマ大統領を育てたハワイ、プナホウ・スクールの教育：キャラクター・エデュケーションとサービス・ラーニングを取り入れた教育の実践」が関東学院大学において開催されました。この講演会を主催した、本研究所・奉仕ボランティア教育研究グループは、過去数年間にわたり、キリスト教と本学の建学の精神に基づいた「奉仕教育観」「奉仕」・「ボランティア」についての研究を行ってきました。今回の企画は、教育活動としての奉仕活動「サービス・ラーニング」についての研究を深め、この実践方法を探り、本学における実践を目指すために、先進的な取り組みに触れることを目的としたものです。

ハワイのプナホウ・スクールはオバマ大統領が卒業した学校として有名ですが、サービス・ラーニングとキャラクターエデュケーション（人格教育）を独自の方法で結びつけた教育を行うことで、学術面のみならず、地域活動の面でも貢献している著名な学校です。

メデイロス氏は「サービス・ラーニングとは何か」、「ボランティアとは何が違うのか」というような基本的な事柄を含めて、実際の授業の構成の仕方、内容に至るまで、実践例を数多く挙げながら、わかりやすく語られました。サービス・ラーニングは私たちの考えるボランティアとは大きく異なり、正規の授業の流れの中で学生が自分の目で地域における課題、問題を発見し、それらを自分の持つ知識や技術を用いてどのように改善できるか、どのように地域に貢献できるかを自分で考え、行動を起こし、さらに、振りかえりの時間を十分にとって、自分を省み、よりよい問題解決のために今後何を学ぶべきか、どのような技能が必要か等考えて、自分の学びにつなげていく、という一連の流れが求められる学びである、とメデイロス氏が強調されていたことが印象に残りました。これはひとつのアクティブ・ラーニングの方法であるということを再認識しました。サービス・ラーニングを効果的な人格教育とするためには、サービス・ラーニング・センターとチャペルの協力が必要不可欠であり、生徒たちを地域に送り出す前に、プナホウではチャプレンの先生とともに決めている道徳的目標（聖書とハワイの伝統的文化に根ざしたもの、「尊敬」「責任感」などの十八項目）を学ぶことになっています。この学びを基礎に生徒たちはコミュニティに出て、地域社会で改善が必要とされることを自分たちの目で見つけます。

教員たちがサービス・ラーニングを行うにあたり、サービス・ラーニングセンターが授業づくりや地域との連携を容易にする大きな鍵となることなど、サービス・ラーニングのための学内のシステム構築についても知識を多く得ました。

プナホウ・スクール（ハワイ語：Kula ‘o Punahou 英語：Punahou School）は、アメリカ合衆国ハワイ州ホノルル市にある私立学校。キリスト教会衆派教会系の教育施設として、ハワイ王国時代の 1841 年にオアフ島のホノルル市に設立された。現在はホノルル市内の広大な敷地を持つ校舎で幼稚園から高等学校（第 12 学年）までの一貫教育を行っている。生徒数は 3,750 人を数え、単独の学校としてはアメリカでも最大の生徒数を持つハワイ州内でも有数の名門校である。幼稚園から8年生までの Junior School と 9 年生から 12 年生の the Academy に分かれ、大学進学率はほぼ 100%である。

本学が学べることは何でしょうか。キリスト教を建学の精神とし、地域との連携を強めようとしている本学にできることは数多くあるように思えます。昨今、学びの意義が見いだせない若者も多く存在しています。地域社会で自分たちの学んだことを生かせると知ったとき、彼らは学びの意味を見いだせるのではないでしょうか。それには、お仕着せのボランティア活動ではなく、学生自身が見つけた課題を、学生自身が考えて解決していこうとする活動、また、活動中や活動後に新たな気づきを得て、学びの必要性を感じるという学習方法を取り入れた授業が有効なのではないでしょうか。ここで忘れてはならないのは「Reflection（振り返り）」です。専門家たちはこれがなければLearning（学習）にはなり得ないと断言しています。

繰り返しになりますが、この一連の学びを効果的に行うためには、教員だけの力では限界があります。授業と地域をつなぐ役割を担うスタッフや、大学レベルの学びを地域活動に結びつけるアドバイスができる豊富な知識を持ったアドバイザーが不可欠です。縦割りではない、相互連携を目指さなければなりません。今後の大学運営に新たな方向性が示されているように思われます。

奉仕教育のもう一つの形の考察

―シェイクスピア英語劇の活動の場合―

学院史資料室／学院宗教センター事務室長　瀬沼達也

奉仕教育の先進国であるアメリカ合衆国他では、どのような学問分野の授業／講義でも奉仕教育の視点で取り組むことが可能であることを知った。そうであれば、どのような課外活動においても奉仕教育は可能ではないかとの思いに至った。そこで、筆者が四二年間携わってきた関東学院シェイクスピア英語劇の活動を例にとって考察したい。

この活動は、学校の特色となる行事として一九四八年に関東学院女子専門学校（関東学院女子短期大学の前身）で始められた。一九五六年に大学と共催となり、二〇〇三年には同短期大学の大学人間環境学部への改組により、大学主催となり現在に至っている。

活動期間は毎年三月上旬から一二月上旬までの約九カ月間で、活動時間は約６００時間、参加学生の平均人数は四〇数名である。学生はキャストとスタッフに分かれて役割を分担し、共通の目標である公演の成功に向けて、各自の能力を生かし、協力し合って活動する。

この課外活動の主要な特色には三つある。

①クリスチャン劇作家・シェイクスピアの戯曲だけの原語上演であること

②演劇教育活動であること

③公演活動が社会的に評価されていること（日本の大学唯一の課外活動）

演劇教育の定義を専門書から引用する。

「演劇教育が第一にめざすものは、身体による表現活動をとおして、子どもたちが人間としての想像力を回復することであり、また、さまざまな立場、考え方、感情をもつ人間どうしが、それぞれの相違点を認めあいながら、しかも、一つの仕事をなしとげる――そういった、集団における人間形成の仕事であるといえるだろう。」（日本演劇教育連盟編集『演劇教育入門』「第一章 演劇教育とは何か」冨田博之著）

演劇教育は、「集団における人間形成の仕事」であるから、学校教育にとって優れた教育手法と言える。演劇の原点は俳優と観客とのじかの交流であるから、以下で観客の存在意義と奉仕教育に関して考察を進める。

観客の前で上演するとき、キャストもスタッフも緊張し、生きていることを痛感する。これは、生きる力を増すことになり、ひいては自己の存在意義の認識に至る。

奉仕教育の観点から述べると、被奉仕者は、演劇における観客に当たる。例えば、奉仕者が老人の肩をもむという行為を通して生きた交流経験をすることになり、老人から「ありがとう」と言われれば、奉仕者も嬉しくなり、自己行為によって他者の役に立った実感を抱く。さらに肩をもんであげたのではなく、もませてもらったことに感謝の念を覚えることもある。他者の役に立つことにより、自己の存在意義を認識し、生きがい感をもてるようになる。そしてそれらが次の奉仕への原動力となるのである。換言すれば、奉仕することによって、人になれる（人格が陶冶される）のである。この点において、本学院の校訓「人になれ　奉仕せよ」の実践が、奉仕教育であると言える。

観客の立場から見るとき、感動や勇気や生きる力をもらえる観劇経験となる。この観客を災害被災者に置き換えるとき、演劇教育が奉仕教育となることは明白である。演劇は、公演自体が観客を対象とした演劇（文化）による社会貢献となり得る。当活動の場合、間接的にも奉仕活動をしている。東日本大震災被災者への支援をするために二〇一一年、二〇一二年の二年間、チケット売上金全額および公演当日の募金全額を寄付し、二〇一三年以降も後者の募金は継続しているからである。

ここまで述べて来たとおりこの活動は特殊ではあるが、他の課外活動においても同様に奉仕教育が成立すると考える。そのポイントは、主体の奉仕者だけでなく、客体の被奉仕者の存在が必要であり、かつその対象者への奉仕の視点の存在および工夫の必要である。以上の考察が、学校における奉仕教育のもう一つの形として今後、奉仕教育を展開する際に役立てば、望外の喜びである。

New Face

キリスト教と文化研究所と関東学院大学教員初年度の私

大学宗教主事　人間環境学部准教授　石渡 浩司

今年度（2014年度）、関東学院大学教員となり、キリスト教と文化研究所研究員に加えていただきました石渡浩司（いしわたひろし）と申します。大学での身分は人間環境学部・人間発達学科（2015年度より教育学部・こども発達学科）准教授です。大学の宗教主事も兼ねており、室の木キャンパスの礼拝の責任を持っております。

キリスト教と文化研究所では、今年度初めから資料委員会に所属しておりますとともに、秋学期からは所報の編集のお手伝いもさせていただいております。私の専門は「新約聖書学」です。最近は、紀元１世紀の30年頃、ユダヤ教の一派として興ったキリスト派（＝イエス派）が、おおよそいつ頃の時点でユダヤ教と最終分離し、「キリスト教」と呼ばれ得る宗教として成立したかについて、その過程も含め、研究をしています。従来、１世紀後半に記されたマタイ福音書やヨハネ福音書において既にキリスト教とユダヤ教の対立が反映されている、と一般に論じられてきました。しかし例えば新約学とユダヤ教学の両方に造詣の深い米国のJ.H.チャールズワースという研究者は、「キリスト教」という語は1世紀の時点では使用できないと論じています。自身慎重に資料分析、文献批判をし、研究を進めていきたいと思っております。

今年度は研究所の研究グループに所属しておりませんが、今後どこかの研究グループに所属させていただければと思っております。どうぞよろしくお願い申し上げます。

関東学院大学　キリスト教と文化研究所
〒236-8501横浜市金沢区六浦東1-50-1
TEL：045－786－7873（研究所直通・月～金9：30～17：00）
FAX：045－786－7806（研究所直通・24時間受け付）
E-mail:kgujesus@kanto-gakuin.ac.jp

発行者：渡部 洋
Director: Hiroshi Watanabe